

# 所蔵戦時資料を事例とした 利用普及活動と学校連携

秋山 淳子

## はじめに

本稿では、今年度実施した所蔵資料を活用した中学校での講演を事例として、今後の学校連携事業や学齢期の若年層への利用普及事業の方法論について検討するものである。

若年層向けの利用普及事業としては、すでに公文書館の前身の文化資料室期である平成14年(2002)度から、継続的に小中学生対象のセミナー「札幌の歴史探検」を実施してきた。ここで採りあげてきた学習テーマは、札幌の歴史を中心としながらも、都市形成や交通、屯田兵などの移住者、雪対策や上下水道の整備、雪まつりやオリンピックなど、多角的視点から市民生活のあゆみを理解できるよう工夫されている。

セミナーでは、前半の1時間程度で職員からテーマに関する講義を受け、後半の1時間程度でミニ新聞を作成するというプログラムで実施してきた(資料として講義レジュメと、新聞記事作成に使用できる画像などの素材を配布)。現在、セミナーは、夏期・冬期の長期休暇にあわせて行っており、休暇課題の補助教材提供も想定している。参加の方法は、広報や公文書館ウェブサイトでの告知をもとに希望者を募る形式であるが、閲覧室を会場としているため、比較的小規模(12名以下)でのイベントとなっている。

また、学校(学年)単位で来館する形式で実施したものとしては、文化資料室期から講演を中心とする学習協力実績がある。こちらのテーマ設定では、前述のような視角に加え、とくに各学校の立地している地域の特性と合わせたものを選定する場合が多かった。近年の実績としては、平成21年(2009)から25年まで来館受入れをした茨戸小学校の事例もあるが、それ以外は単発的に実施されたものであり、継続的な関係性を結ぶ学校連携といえる段階には至っていない<sup>1</sup>。

こうした学校(学年)単位での連携事業は、公文書館として開館し、その行政上の役割理解を促す意味でも、施設見学を含んだ総合学習や地域教育のテーマ学習などの題材として、積極的な来館利用を期待したい分野である。しかしこうした需要を喚起することは、課題として従前から認識されていたものの、その実現にはアピール不足であると同時に、来館時の学習スペースや教材研究という点からも更なる考究が必要と考えられる。

そのほか、公文書館で開催している講演会や古文書講座などについては、参加者が比較的高い年齢層が主体であり、学齢期にあたる若年層への普及活動という点では十分な効果が期待できない状況である。

そこで、今後の学齢期を中心とした若年層の積極利用を喚起する方法論として、教材としての所蔵資料の活用と、学校を会場とした本館職員の講演活動による普及をひとつの足掛かりとして考えてみたい<sup>2</sup>。この場合、児童生徒の大掛かりな移動を必要としないため、学校側にとって受け入れやすく、現状でも実現可能性の高い広報活動であり、利用喚起への呼び水として有効であろう。

こうした問題関心から、本稿では、1で本年度に実施した立命館慶祥中学校での活動事例を報告し、2でその際に得られた成果と課題について整理した上で、3でその後に収集・公開となった戦時関係資料を紹介しつつ、今後の活動への展開性を検証したい。

## 1 立命館慶祥中学校での講演内容

### (1)講演の位置づけ

今年度の活動実績として、筆者が担当した立命館慶祥中学校における講演および資料閲覧解説(実物資料を生徒が手に取って閲覧する)について報告したい。

講演は、同校の第2学年を対象とした総合学習の一環である総合特別講演会という位置づけで、「札幌市民と戦争～札幌市公文書館所蔵資料からみる戦時下の札幌～」と題して行った。中学校の担当教諭によれば、今回の総合学習では戦後70年の節目であるとともに、秋期に立命館大学平和ミュージアムを訪問する学習計画があることから、調べ学習のテーマに「戦争」を採りあげた。

講演の前後では、「地元地域と戦争がいかなる関わり方をしていたのか」について、生徒個人が「戦闘機」、「強制労



働」、「一般民衆の生活」など各自キーワードを設定し調査を行い、その後調べ学習で生じた課題をもとに仮説をたて、さらに調査を進めて成果をまとめ、それらを通じて調査研究方法を習得する授業へと展開予定とのことであった。また、依頼時の生徒の調査対象をみると、戦争に直接的に関わる事項(空襲、飛行場など)のほか、戦闘機の製造、勤労奉仕、金属の強制回収など、「戦争に向かう国家をいかに地域社会が支えていたか(支えさせられていたか)」という点にも興味関心がある生徒が多いという報告をうけていた。

それらを踏まえて担当者と協議した結果、内容としては地元地域と戦争の関わりに焦点を当てたものとし、講演を調べ学習からまとめ作業へ向かう結節点として位置づけ、事実関係の基本的事項を整理するとともに、多角的な視点から「戦争」について考え、調査をする主題・材料を整理・提供することを目的に設定した。さらに講演後に、現物資料の一部を提供し、筆者および教員立ち合いのもとで、生徒が直接手に持って閲覧できる時間を設けることとした。

その結果、講演時間は約1時間で質疑応答を20分程度、その後会場を移して実際の資料に触れる時間を、学年全体を二分し交代制で各15分程度実施した。

## (2) 講演概要と資料解説

### ① 講演内容紹介

つぎに、講演の概要をたどりつつ各項目での提示意図を紹介するとともに、代表的な所蔵戦時資料について解説をしていく。

講演の構成は以下の通りである。導入部につづき、第1部では戦争と市民が直接関わる事象を紹介し、第2部で地域社会がどのように戦争を支えたのか、札幌での市民生活の実態に注目した。第3部では、そうした生活の中で市民が戦争に対してどのようなまなざしを向けていたのか、不満と高揚感・憧憬が共存する状況を紹介した。そして最後に「むすびにかえて」として、これらを伝える記録の役割にも言及しつつ、今後の生徒の調査研究への橋渡しとして、記録を慎重に読み込み「評価をする」ということの意味と難しさ、重要性を指摘して、再度「戦争」とは何かと問いかけて、各生徒が自分の力で調査し回答を得るよう促した。

また、講演の本論に先立って自己紹介を行い、筆者の立場(アーキivist・日本近現代史研究者)の説明を通じて、「人々のあゆみをどう伝えるか?」「記録をどう残して、活かしていくか?」という、講演を下支えする問題関心を紹介した。これは単に専門的知識を教示するだけではなく、筆者が行っている研究活動が、総合学習の主眼である調査学習と手法や課題を共有していることを示そうとしたものである。さらに生徒が調査材料とする記録についても、それを守り、伝える環境づくりまで視野を広げてもらうことを目的として講演への導入に位置づけた。以下、構成(右図)に即して講演内容を具体的に解説したい。

#### 【序 「戦争」ってどんなものだと思いますか? ~地域社会と戦争の関係】

本論冒頭に、生徒に対して「『戦争』ってどういうもの?」という問いかけを行った。そして戦争は「だれが」「どこで」やるものか、という基本的な認識について、昭和の戦争は単に「兵隊が戦場にて戦う」だけでなく、地域社会を取り込んで「国民全体で取り組む戦争(総力戦)」であったことを確認した。これを軸に、札幌市民が直面した戦争とはどのようなものであったのか、日々の暮らしや財産への影響、人々の思いなど、札幌市公文書館の所蔵資料を手がかりに具体的に検証するという講演テーマを提示した。そして、ここで公文書館の概要と利用上の特徴についても、あわせて説明を行った。

#### 【1. 軍隊と札幌~地域社会:札幌はどう「戦い」に係わったのか?】

具体的検討のはじめとして「1.軍隊と札幌」では、地域社会が直接戦争にかかわった部分、すなわち生徒たちの一般的な戦争イメージに近いトピックスについて、札幌においてはどのような状況であったのか検討を行った。

●札幌市民と戦争	
~札幌市公文書館所蔵資料からみる戦時下の札幌~	
序	「戦争」ってどんなものだと思いますか? ~地域社会と戦争の関係
	0.1 「戦争」ってどういうもの?
	0.2 札幌市民の「戦争」
	0.3 札幌市公文書館とは
1	軍隊と札幌 ~地域社会:札幌はどう「戦い」に係わったのか?
	1.1 札幌にいた「軍隊」
	1.2 札幌空襲
	1.3 戦争にいく:出征
2	戦争に「協力する」札幌 ~地域社会:札幌はどう「戦争を支えた」のか?
	2.1 戦時下の市民社会:地域住民の組織化
	2.2 防空演習・灯火管制
	2.3 疎開(建物疎開)
	2.4 配給
	2.5 勤労奉仕
	2.6 物資の協力:供出
3	「戦争」へのまなざし ~地域社会:札幌の市民は「戦争」に どんな思いを抱いたのか?
	3.1 生活の苦しさ
	3.2 「あこがれ」のまなざし
4	むすびにかえて ~「記録」からたどる「事実」
	4.1 「記録」が語るもの
	4.2 「事実」とその評価

### (1.1 札幌にいた「軍隊」)

はじめに札幌にも軍事施設が存在していたことを示し、月寒地区の歩兵第25連隊・北部軍司令部や厚別弾薬庫、白石兵器補給廠、札幌飛行場(北区北24条付近)、美香保公園(高射砲台座遺構)など主要な施設について、写真資料とあわせて概要を紹介した。

### (1.2 札幌空襲)

昭和20年7月14・15日の米軍空母艦載機による札幌市内への爆撃・機銃掃射について紹介した。具体的には被害概要(地域、施設)および周辺民家での被害について触れるとともに、道外の主要地域で多くみられたような市街地への大規模空襲との違いや、前項で紹介した主要軍事施設に被害がなかったことなど、札幌の特徴を明確にした<sup>3</sup>。

### (1.3 戦争にいく:出征)

前項の内容をうけて、もっとも市民が直接的に戦争と関係を持った部分として、出征に関する資料を紹介した。ここではやや詳しく内容に立ち入って資料解説を行いたい。

まず、昭和13年9月の中国戦線への「出征出発記念」<sup>4</sup>(【写真1】)を提示した。写真中央の出征兵士(宮口豊吉少尉)に対して、子どもや割烹着にたすき掛けの女性



写真1

を含む多くの近隣住民が集まり、旗を持って整列して送り出す様子を説明した。この写真からは南1条西11丁目の商店群を背景に、地域ぐるみで出発式を行う当時の状況がよく理解できる。

こののち戦線の拡大につれて、市民の出征先も樺太から太平洋地域(ニューギニア方面)まで広がっていった。その結果、地域からの出征が常態化していくなかで、次第に出征式も小規模なものとなっていくが、この段階ではかなりの規模であったことが看取されることを説明した。

次に、出征後の兵士とその家族が迎えた「終戦」について、夫婦間でやり取りされた軍事郵便をもとに事例を紹介した。【写真2】は昭和18年7月に出征した米田利吉から妻直江へ宛てたはがき一枚である<sup>5</sup>。利吉の入営当時、直江は妊娠中であり、樺太に派兵された利吉からのはがきには、必ず「御身大切に」という直江を気遣う言葉が添えられていた。そして年明け早々に長男が誕生し、そのことも利吉へは手紙で伝えられた。そして、それを受けてのはがきには「男の子が生まれた事自分も喜んで居ります」とあり、父親となった素直な喜びが表現されている。

こうして利吉から送られてきた軍事郵便の総数は52通におよび、そこには家族の身を案じる言葉のほか、米田母子を支える周囲の人々に対する感謝の念や、季節の移ろいなど細やかなやりとりが綴られていった。その後、20年になると頻度が低下し、5月を最後に利吉からの便りがないまま終戦を迎える。直江は利吉の行方を方々に尋ねて回ったそうだが、詳細は不明であった。しかし22年5月になって、利吉が樺太北部の国境に近い古屯幌見峠付近において、20年8月16日の戦闘で前額部貫通銃創によって戦死

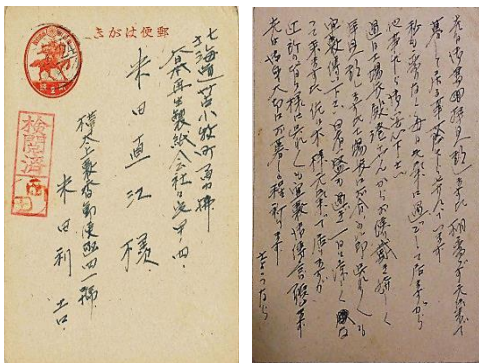


写真2

を遂げたという戦死公報を受け取るのである。このように、夫婦で交わされたはがきという実物の記録を通じて、一組の夫妻が歩んだ出征から「終戦」までの道のりを跡づけた。

さらに、所蔵資料のなかから実際に戦地から持ち帰られた現物の出征旗を提示した。そのうち一つ<sup>6</sup>は生地にかかなりの汚損があり(【写真3】)、それは何によるものかを生徒にも問いかけた。そして、それらの声をひろいつつ、その要因が戦場での爆風や銃弾などによる破れ、血痕や油染みなどと推定できるものであることを説明し、兵士がぐぐり抜けてきた生々しい状況を伝える記録であると紹介した。



写真3

こうして札幌と戦争との直接的な関わりについて多角的に検討し、空襲による被害は多くはなかったものの、市民は多く兵士として出征し、多大な損失をこうむった家族がいたという事実もあり、やはり国民として深く関わっていたことを解説した。

## 【2. 戦争に「協力する」札幌 ～地域社会:札幌はどう「戦争を支えた」のか?】

次に、地域社会:札幌が戦争と最も密接に関わっていたといえる、戦争協力、「銃後」の生活という側面から検討した。

## (2.1 戦時下の市民社会:地域住民の組織化)

まず、地域社会における戦時体制の基本となった住民の組織化について説明した。昭和15年に札幌市は全域に「公区」と、それらを複数統合した「連合公区」を設置し、地域住民もこれにより編成され、地域生活・行政の基本単位として利用されることとなった。また市民個人としても、在郷軍人会や国防婦人会などへの団体加入が奨励され、こうした機構を通じて各種統制政策が推進されたという概略を解説した<sup>7</sup>。

そしてこうした体制づくりをうけ、次節以下で市民生活に大きく影響を及ぼした複数の事項を採りあげ、戦

時体制が与えた地域社会の変容を多角的に理解できるよう、それぞれに関連する資料を提示しながら解説を行った。これらについてもやや内容に立ち入って説明をしていく。



写真4

## (2.2 防空演習・灯火管制)

昭和12年に防空法が公布され、日中戦争勃発後には次第に日本各地で防空演習が実施されるようになる。これと歩調をあわせ、札幌でも同年から防空演習が開始される。さらに14年の警防団令公布と16年の太平洋戦争開戦によって、民間での消防・防護機能の体制が強化され、各地域でも警防団の指導のもと避難や消火の訓練を頻繁に実施するようになった。ここでは昭和19年に札幌市が作成した『防空教科書』<sup>8</sup>の内容を紹介するとともに、実際の訓練の様子を写真で紹介した。【写真4】<sup>9</sup>は消火訓練の典型であるバケツリレーの様子であり、【写真5】<sup>10</sup>はガス弾処理訓練の様子



写真5



写真6(3枚)

である。ガス弾の着弾地を示す標識(先端部の旗には「耐久性瓦斯弾」と表記されている)の周囲を、防毒マスクを装着した住民が消火薬剤を散布する訓練を行っている状況がよくわかる。また【写真6(3枚組)】<sup>11</sup>は円山地区での訓練を時系列で捉えたもので、メガホンをもった台上の指導者の指示により、大人も子どもも参加して地域ぐるみで行った消火訓練の様子が看守できる。さらに灯火管制についても目的と方法について概要を説明し、灯りの消えた駅前通りの写真や、その不自由さを述べた回想等を紹介した。

## (2.3 疎開(建物疎開))

札幌で実施された疎開は、一般にイメージされる子どもを中心とした人口移動の疎開ではなく(計画中に終戦を迎えたため未遂)、建物疎開であったことを写真資料により説明した。まず瓦礫が散乱する広い道路空間を捉えた【写真7】<sup>12</sup>を提



写真7

示して、「ここはどこか?」という問いを発し、20年6月に米軍によって撮影された航空写真【写真8】<sup>13</sup>を提示して、豊平川から南4条通りと石山通にいたる部分がT字型に道路拡幅がなされていること、さらに画像を拡大すると路上には残骸のようなものが散見される建物疎開の状況を説明した。その上で、現在もこのときの拡幅が継承されているため、当該道路が他と比較して広がっていることを示し、現代との連続性を強調した。

## (2.4 配給)

前述の公区を単位とした地域住民に対して、あらゆる物資が人数・家族状況(乳幼児・病人の有無など)に応じて分配されたことや、購入方法(切符方式)など、配給制度の概要を説

明し、回覧記述からその配分の実態について検討した。使用した回覧板綴りは当館所蔵の今田敬一資料である<sup>14</sup>。物資の配給については、市が公区の総量のみを配分し、各戸への実際の割当決定は各公区役員に一任されていた。そのため回覧記述からは、割当量の基準説明や少量物資に対する分配希望者の募集告知など、役員が苦慮しつつ調整を行っていた状況が判明することを解説した(【写真9】)。

### (2.5 勤労奉仕)

学校生活が勉強ではなく、「勤労奉仕」という労働力の提供が主体になったことを説明し、動員に関する記録を紹介した。とくに昭和20年に木製飛行機の材料を制作する工場に動員され、作業中に指を失う重傷を負った女学校生徒の北島奈緒美の事例は象徴的である。

事故の状況は彼女が社長から授与された「感状」と、本人による戦後の回想とでは大きく表現が異なっていた<sup>15</sup>。「感状」によれば、北島は率先して「機械の空転ヲ惜」しんで困難な機械作業に取り組んだ結果、不幸にも負傷した。しかし「泰然自若トシテ向後ノ処理ヲ明確ニシ自己ノ不顧サルノ責任感ト必勝滅私ノ奉公心」を讃えられ、生産責任者である社長から「感状」を贈られたとしている。ところが、後世の回想において機械作業は自発的に担当したものでなく、事故後の状況も呆然としていたと記述している。そのためここでは、この学生以外にも実体験とそれを記述したものとでは、しばしば内容や表現に遊離や誇張、矛盾などが見られることを指摘し、記述への批判的・検証的姿勢の重要性と、そうした相違が発生する背景にこそ注意が必要であることを解説した。

### (2.6 物資の協力: 供出)

供出制度の概要と、その対象が金属や食料から、市民財産のさまざまな部門へと広がっていった実態を説明した。【写真10】<sup>16</sup>は、運送店で使役していた馬が軍馬として供出対象となり、その「出征出発式」を行った際のものである。この運送店では使役馬の半数を供出したが帰還することはなく、さらにトラックまでも徴発をうけ営業面で多大な打撃を被ったと回想している<sup>17</sup>。また、毛皮類の供出として市民の畜犬・畜猫も対象となったことを紹介し、その回想や実績数などから実態へのアプローチを行った<sup>18</sup>。



写真10



写真8

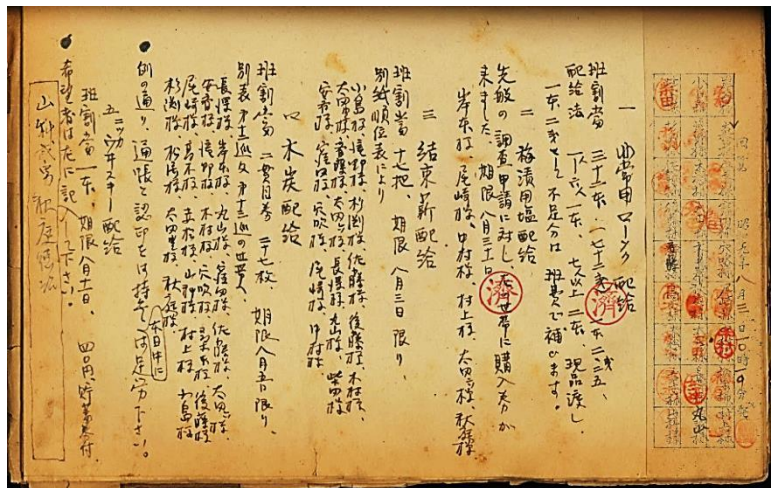


写真9

### 【3. 「戦争」へのまなざし～地域社会: 札幌の市民は「戦争」にどんな思いを抱いたのか?】

ここではこれまで見てきた戦時期の生活実態に対して、市民がどのような思いを抱いて、どのような行動をとっていたのか、再度検証することとした。その意図は、現代において多用される「戦争は悪であり、阻止すべきもの」という言説と、当時の各種資料記述にみえる人々の言動、そして当時を回想する人々の表現との関係性(相違)を整理し、記録の読み込み方について慎重に考える必要性を指摘することである。こうした経験を通じて、生徒が史料批判を

前提とした客観的評価の重要性を理解するとともに、その難しさを感じながら調査学習を進めることへつなげたいと考え採りあげた。

### (3.1 生活の苦しさ)

とくに学齢期の回想から、物資不足や学校生活での不満(学べない、訓練ばかり)、灯火管制や思想統制等による不自由さなどの声を紹介した。これらは後世の回想において、一般に多数派となる感想である。

### (3.2 「あこがれ」のまなざし)

しかし一方で、当時の軍隊や国家に貢献することへの「あこがれ」や「高揚感」といったものも存在したことを紹介した。「献納運動」に関する新聞記事や、「支那事変記念スタンプ」<sup>19</sup>(【写真11】)、また女学校生徒の進路選択に関する回想で、軍隊への就職を「華やかでいい」と志望し、北部軍司令部に就職したこと<sup>20</sup>などを採りあげた。こうした記録からは、とくに子どもたちのなかでもそうした感覚が広く共有され(むしろ高揚し)、行動に移されていたことを示した。しかし、それと表裏一体のものとして、そうした感情を惹起させる要因についても考慮が必要であることを説明した。例えば子どもに魅力的に映るスタンプラリーのような「装置」が果たした役割についても、慎重に考えることが重要であると指摘した。



写真11

「華やかでいい」と志望し、北部軍司令部に就職したこと<sup>20</sup>などを採りあげた。こうした記録からは、とくに子どもたちのなかでもそうした感覚が広く共有され(むしろ高揚し)、行動に移されていたことを示した。しかし、それと表裏一体のものとして、そうした感情を惹起させる要因についても考慮が必要であることを説明した。例えば子どもに魅力的に映るスタンプラリーのような「装置」が果たした役割についても、慎重に考えることが重要であると指摘した。

## [4. むすびにかえて ～「記録」からたどる「事実」]

講演のまとめとして、「記録」の特質とその活用方法を確認し、今後の調査学習への橋渡しを行った。

まず、今回提示した多くの記録は、さまざまな立場の人間が同時代的に作成したもので、それぞれ「実際に起こったこと」が語られている、という点を確認した。しかしそれらは、さまざまな表現(誇張やときに「嘘」を含む)を用いて記述していることもあわせて指摘し、さまざまな資料から当時の人々がどう出来事を見て、感じていたのか読み込みことが重要であると説明した。それをふまえ、そこに語られている「事実」を自分たちはどう評価すべきか、ということが調査学習の課題であると示し、もう一度『戦争』って、どんなものだろうという問いに回帰し、講演を終了した。

## ②実物資料の閲覧体験

講演終了後、会場をオープンスペースに移し、2列に配置した長机の上に講演で使用した実物資料の一部6点【表1】

【表1】 閲覧提供資料リスト		
種別	登録番号	タイトル
特定重要公文書	2015-0707	米田家資料
特定重要公文書	2015-0700	今田敬一資料 (桑園連合公区第五公区回覧板綴)
文書	14238	忠誠報国国旗
文書	34424	出征国旗
文書	34434	支那事変記念スタンプ帳
図書	52983	井上こみち『犬やねこが消えた』

を提供し、筆者および教職員立ち合いのもと自由に閲覧する機会を設定した。限られた時間ではあったが、生徒たちは積極的に資料を手を持って具体的記述を読み込んでおり、同時に質感など文字情報以外のものへも強い関心を示していた(【写真12】)。筆者は具体的に資料の取扱上の注意点(媒体本体のもろさ、綴り順を変更しない等)について説明しつつ、文字の読み方、内容に関する質問を個別にも受け、理解を深めることができた。



写真12

## 2 立命館慶祥中学校講演の成果と課題

### (1) 生徒からの反応

次に講演を受けて、生徒たちがどのような反応を示したのか、当日の質疑応答および後日寄せられた感想文をもとに、具体的事例を挙げつつ確認する。総体として、講演中にもしばしば問いかけを行いつつ展開したが、大変積極的かつ思慮に富む取り組みが見られた。

質疑応答(実物資料閲覧時を含む)では、事前の調べ学習中に生じた疑問を解決するもの(なぜ空襲が北海道と本州で異なるのか等)や、講演内容から考えた事項(供出対象となった犬猫はその後どのような扱いを受けたのか等)、さらには現代政治・社会問題に通じるもの(戦争はなくなるのか、「平和」とは何か等)まで、多様な質問が相次いだ。これらは事実確認にとどまらず、その場で回答が終了できないものもあり、むしろ筆者の見解を示しつつも、さらに自らの調査課題として考究を促すものも多かった。

また、講演後の感想文から生徒たちの反応をまとめると、主に次のような傾向がみられた(以下、特に断らない限り〔〕内が生徒の感想文からの引用)。

総合的な感想としては、「戦争とは何か?」という第一の問いかけに関し、従来の自分の認識を改めたという声が多数にのぼった。具体的には、単に国と国との意見等の対立から武力衝突をする、または〔兵隊と国の一部が本格的にたずさわり、国民はやられているだけ〕というような考えであったものが、総力戦のなかで〔国民も戦争に間接的に参加している〕状況であったこと、戦争をするのは国民であるということを理解した(〔一番初歩的な事を忘れていた〕という表現もあり)というものである。そのうえで、〔攻撃されることだけが戦争の被害ではない〕、戦争とは〔人の道徳心を根本からくつがえすもの〕、〔戦争というものが奪っていくものの大きさを、今回の講演でははっきりと確認することが出来た〕。そして、〔戦争について深く知ると「兵隊さん達が戦うこと」なんて、簡単に語ることは決してあってはならない〕、〔今の暮らしは決して当たり前ではない〕、〔知らなかったことはもちろん、「知っているつもり」になっていたことまで、深く知ることができてとても良い時間になった〕などのコメントが寄せられた。

また、自分の身近な地域名とともに戦争が語られたことによって、〔身近な地名やよく知っている地名がでてきてびっくりした〕、〔なるほど私たちの住んでいたところも戦争をやっていたんだな、という気持ちに今さらになりました〕といった反応も多く見られた。その上で、美香保公園には行っていたが〔高射砲を確かめてみたい〕というように、自分でも実際に確認したいという声も散見された。

その一方で、戦争が国民に与える影響については、さまざまな見方が現れた。大半はその残酷さや悲惨さに中心をおく意見であったが、人々を強力に動員していく〔戦争自体のもつ力の強さ〕や、〔国が大きく発展する〕機会ととらえるものもあった。こうした戦争の積極的評価といえる意見は、現在の日本国内では比較的少数派と考えられる。しかし、諸外国では国力の伸張と戦争を結びつけ、その犠牲をたたえる言説は広く流布している<sup>21</sup>。その意味で、こうした評価をどう捉えるのかという課題は、これからのグローバル化が進展する社会を生きるうえで、生徒たちにとっても重要な論点のひとつと考えている。今回は、こうした視点については講演・質疑応答でも説明することができなかったが、その後の学習でどのように議論がなされたのか、大変興味深いところである。

### (2) 特徴的な反応について

次に、感想文において特に反響が大きかった点について確認する。

具体的なトピックスとしては、個人の戦争体験にクローズアップした米田夫妻や、女学生北島奈緒美の事例には心を寄せる声が大きかった。また、犬猫等の動物供出については、講演時にペットを飼っている人に挙手も求めたが、非常に大きな反響があった。やはり動物の命までもが「物資として奪われる」という文脈に、ペット飼育の有無にかかわらず、生徒全体が強い衝撃を受けていることが顕著であった。当時と現代とでは、ペットの「家族」として価値観という点で重要性を差し引いて考える必要があるが、こうした事実を手掛かりに、生徒が〔これまで戦争では人の命が奪われることを問題視してきたが〕失われるものは人の命だけではない〕、〔戦争をすることで、失ってしまうものがたくさんある〕と実感できたのは、大きな意義があったと考えられる。

また、今回、講演と実物閲覧という形式をとったことに関しても反響が大きかった。具体的には、事前学習がインターネットを中心とした調べ学習であったこともあり、実際の資料を提示しての解説はわかりやすく、〔インターネットではわからない、貴重な情報を教わった〕という感想が多かった。また、〔人の声から聞く情報と(ウェブサイト上の)目で見える情報は全くちがいました。(中略)心の奥まで伝わってきました〕という、講演そのものの効果についての意見もあった。

そして、大多数の生徒にみられた感想が、講演と実物閲覧をあわせて行った効果についてである。講演内容で紹介した実物を手に取るという体験をしたことで、〔けっこう生々しく伝わりました〕、〔手で触れることによって昔の戦争状況等を想像することができました〕といった意見は多数にのぼった。さらに、出征旗については〔汚くて血のようなものが付着していて、穴がたくさんあいていた。ということは、戦争に行くと自分もこのような感じになると教えている〕という、資料の読み込みに値するコメントも寄せられた。

### (3) 分析視角の多角化の試み

また、第3部で紹介した「軍隊へのあこがれ・戦争に対する高揚感」というテーマについては、やや複雑な反応となった。今回筆者は、この論点を採りあげること自体が相反する人々の心情を紹介することになり、中学生にとっては戦争理解を難しくするのではないか、という懸念をもっていた。しかし、当時の記録から浮かび上がる多面性を理解すること、現代社会における戦争に対する国際的な価値観の多様性を考慮し、あえて資料を提示することとした。いわば、将来的に獲得を期待する、戦争理解に必要な分析視角の多角化を試みたものである。

この結果、当時の市民(とくに同世代の若年層)が「あこがれ」や「高揚感」を抱くのは、[なぜかわからない]という感想や混乱している旨の表現も多くみられるものの、その理由を自分なりに考えた様々な推察が寄せられた。最も多かったのは政府による[洗脳]、[幻覚を見せられている]や[進めかたが上手い]という意見と、その恐ろしさに言及する意見である。具体的には、女学生北島の事例にみられた実態と表現の遊離や、記念スタンプの機能に言及したものが多かった。さらに[こんなにたくさんの悲しみがあるのに若い人たちが軍隊にあこがれるわけは、私はすべてが暗い毎日の中で軍隊だけが明るいイメージを出すようなポスターや放送など国が出す今でいうメディアみたいなもののせいなのではと考えました]という、いわゆるプロパガンダの本質をつく理解もみられた。

これらに共通するのは、表現は未熟ながらも、それぞれに生徒たちが戦時下の社会に形成された構造的な特徴(思想統制、メディア規制も含む)について、積極的に考察を加えようとしたものである。今回は、理解できないという感想や多様な見解について、問題提起者である筆者から再度回答する機会をつくれなかったため、これらを整理し、理解のみちすじを示すことはできなかった。しかし、ひとまずそうした論点を調査課題の視野に入れられたことを成果として評価し、その後の学習における発展を期待したい。

### (4) 記録活用の視点からの検証

次に、記録を読み込んで「事実」について考えるという、本講演の中心テーマについて生徒の反応を検証する。この点については、まず次の感想文を紹介したい。

これは調べ学習のテーマを「札幌の子供達と戦争との関わり」に設定し、調査をしていた生徒のものである。事前調査の結果、[子供達は「未来の兵隊」として育てられ]、[戦場で勇敢に戦って死ぬ、つまり国に貢献することが立派な生き方であり、誇りであると学校では教えられたと知り]、[一種の洗脳]による自由の剥奪であると感じつつも、[当時はやはり仕方ないことだった]という感想を持っていた。そしてこの生徒は、これを裏付けるものとして、子どもたちの日記資料に着目する。

[当時の子供達も私のように自身の状況は仕方ないこととわかっていたのではないかと資料を見つけました。それは子供達の日記です。(中略:日々の授業や玉音放送についてなど様々な記述があり) その内の多くの日記が自分としては嬉しくもないことに違いないのにもかかわらず「日本のために私も…」という決意の言葉でしめくくっていました。]

これを見て、[自分の状況を受け入れ国の期待に一生懸命に応えようとするけなげな子供達の姿]を思いうかべていた。しかし講演を受け、記録の表現の読み込みという意味から[本当にみんな受け入れていたのか、自分の運命に逆らいたい人はいなかったのか]という新たな疑問が浮かび上がったという。そこで、[様々な「記録」を調べてどう感じていたのかという「事実」を考えてみたいと思いました。私の学びの幅を広げてくださって、本当にありがとうございました]と感想文は結ばれていた。

この事例は、事前学習において、すでに記録による検証という基本的な分析手法を理解し、実行していたが、さらに講演によって「読み込み(史料批判)」の視座が開かれたことで、より深い考察へと進んでいったことがわかるのである。さすがにこの段階に達している生徒は他に見受けられなかったが、それでも本講演の主要課題である「記録の活用による教育実践」という視点から、成果として評価できる具体的コメントは多くみられた。例えば、[その時代に生きていた人の記録をよみ、真意を考えることで、私たちは戦争のあり方、そして改善策を考えることになる]というものが代表的である。

また、他者の体験について、記録を読み込むことで疑似体験し、それにより戦争体験を内面的に理解できることも記録活用の機能の一つであると紹介した。これをうけて[そのことを体験してくれないと、分からなかったこと、体験してくれたからこそ、分かることがたくさんあって、すごくありがたい]、[戦争があったから分かったこと、今後に活かしていきたい]という感想も寄せられている。そして記録を通じて、[(戦争では多くの苦しみや大変さがある) そんな中でも懸命に生きていたということが分かりました]というコメントもあった。これは、当時の人々も現代人と変わらず、与えられた状況のなかで「懸命に生きていた」という筆者が提示しようとした実態を把握し、疑似体験的ではあるが、等身大の理解・共有化ができたものと考えられる。

こうした成果を総合すると、今回提示した所蔵資料は十分に地域学習教材として機能することが判明し、それらを活用していくことは、講演以外の手法(例えばウェブサイト上での公開・解説)も含めて、利用普及事業および学校連携事業において大いに検討していくべき課題であることが明確になった。



## (5) 学校講演活動における課題

まとめとして、今回の講演の成果と今後の課題について整理しておきたい。

まず成果としては、実際の記録をベースとしてトピックスを選定し、具体的に戦争について論じることは、生徒にとっても理解しやすいものであることが明確になった点である。さらに講演に使用した実物の記録を、その直後に手に持って閲覧できるという形式は、大変有効であることが確認できた。なお、今回の生徒感想文に現れたコメントの内容は筆者の期待を大幅に上回るものであり、単に来館を促すのではなく、「学びの場」に実物資料を持ち込むということの重要性を実感する機会となった。これは資料所蔵機関でなければできない、本館の強みにつながる成果である。

その一方で、大きな課題が残った。それは、講演後のフォローアップができなかったことである。当日の質疑応答に際しては多くの挙手があり、時間内にすべて回答することができなかった。そのため、ほぼ全ての生徒感想文には筆者への追加質問が記されており、さらに最後に筆者から発した再質問「戦争とはどんなものか」に対する自身の見解を示した上で、それに対するコメントを要求しているものが非常に多かった。これに対応できなかったのは、最も反省すべき点となった。

また、前述したように戦争の影響に対する評価における多様な見解(戦争意義の積極評価を含む)や、第3部で採りあげた「あこがれ」や「高揚感」の理解に関しては、議論を整理し、各生徒が自分なりの結論をつかむまでの理解のみならず、とくに第3部の論点については、あらかじめ一定程度の混乱を想定していたにもかかわらず、その収束に積極的に取り組めなかったことは大きな反省点であり、今後の課題である。

こうした反省点からは、中学生のように基礎知識が十分ではない若年層を対象とした場合、講演後の整理や追加説明が必要であり、そのためには学校訪問の機会を二回以上設けることが最も効果的であることがわかった。現在、同校と次年度も引き続き同様の講演活動を展開することで交渉を行っているが、この点はぜひ改善していきたいと考えている。

以上が、立命館慶祥中学校での事例による考察であるが、こうした学校を会場とした講演活動については、本館の学校連携事業の手始めとして、今後大いに活用することが重要である。今回使用したテーマは「戦争と札幌」という、限定された時代のトピックスではあったが、「記録をもとに地域のあゆみや今後を考える」という本館の役割の本質に合致する成果が得られたと考えている。こうした意味においては、総合的な札幌の歴史学習・地域学習に公文書館を組み込み、位置づけていくという最終的な目標の足がかりとして、まずは「戦争とはなにか」という普遍的なテーマにおける「各論」として、「札幌ではどうだったのか」という事例学習として所蔵資料をもとに検証する、という方法は十分に有効であろう。

さらに、そうした「各論」として戦争と地域社会を考える素材である戦時資料は、当館の所蔵資料のなかでも、若年層以外も含んだ利用普及事業に活用しやすいものと考えられる。したがって、将来的に特定重要公文書の総合的活用へと導く糸口として、そうした戦時資料についての十分な分析と、意識的な収集・整理・公開が今後の課題であると思われる。そこで、次に章を改め、今年度に行った戦時資料活用にむけた取り組みを紹介したい。

## 3 戦時資料による利用普及事業への展開

### (1) さっぽろ閑話「戦争と札幌 ～地域からみた戦争」

立命館慶祥中学での講演をもとに、一般市民向けに再構成して実施したのが、さっぽろ閑話「戦争と札幌」(10月24日開催)である。ここでは基本的に同一の資料を材料として、“記録を作成した人物たちの「等身大」の声をきく体験”をテーマに、さまざまな一般市民の「生き様」に触れることを目的とした。そしてそうした声の橋渡しを行うことができるのが記録の力であり、その記録を守り、伝えるのが公文書館などの所蔵機関の役割であると説明し、公文書館への理解を高めるよう努めた。

また、さっぽろ閑話においても、講演後に直接使用した資料を提供し、参加者に手に持って閲覧してもらう時間を設定した。これもやはり好評で、とくに戦時期の劣悪な紙質が想像以上であったなど、反響が大きかった。

このように中学生の講演活動をもとにつくられた「実物資料を用いた講演」と「講演後の資料閲覧」の形式は、一般市民向けのイベント手法としても大変有効であった。その大きな要因は、参加者の年齢層の中心がすでに戦時時期を体験的に理解している年代ではなくっており、伝聞的に把握している事実を、記録によって「体験化」できる機会として位置づけられていることであろう。今後もこうした形式での講演は、素材となる記録を所蔵している機関ならではの特長であり、公文書館の利用普及活動において主導的役割が期待できるものと考えられる。

### (2) 新規公開の戦時資料の活用

次に、今後の講演材料として活用が期待される記録について、代表的なものを2点紹介したい。これらは今年度の講演後に、新たに収集もしくは整理、公開したものである。

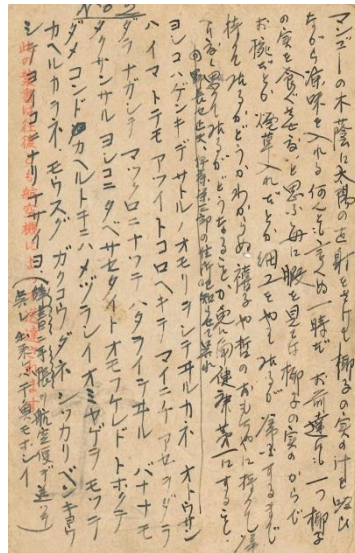
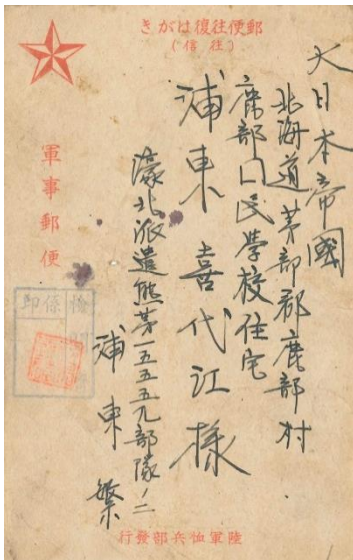


写真13

### ①浦東繁資料「軍事郵便」【写真13】

本年度浦東繁氏の長女禧子氏より寄贈をうけた、はがきのシリーズである<sup>22</sup>。父・繁は昭和18年に招集を受け、旭川に入営後、ニューギニア戦線に派遣され、当該地域で戦死を遂げた。このはがき群は、旭川時代およびニューギニアに派遣された当初の昭和18年～19年にかけて、家族(妻喜代江、禧子)に宛てて書かれたものである。軍事郵便としては北方戦線(樺太)へ出征した米田資料があるが、こちらは南方戦線であり、当時の戦線の広がりや理解できる適切な素材として位置づけられる。また、浦東夫妻はともに教員であったこともあり、はがきには必ず当時5歳の娘に宛ててカタカナの記述が添えられている。そこには翌年度に小学校入学を控え、勉強への心構えや日々のくらしでの注意など細やかな言葉が綴られていた。

こういった特性は、とくに年齢に近い学齢期向けの教材としても最適なものといえるだろう。

### ②「資源回収事務関係書類」【写真14】

市民から札幌市の各機関へ寄贈された資料のうち、市史編纂の参考資料として文化資料室が移管収集していた未整理資料を順次整理公開している。「資源回収事務関係書類」もその一つで、札幌市への寄贈経緯・時期等の詳細は不明であるが、複数の北海道庁関係簿冊からなるシリーズに含まれているものである<sup>23</sup>。

この簿冊からは、昭和16～18年の金属資源回収政策について、政府からの通達(方針説明、事業計画、要綱要領等)と、それをうけて北海道庁が作成した各種文書(会議書類、事業説明資料、回収実績調査結果等)が綴られている。ここからは、工場等の指定施設および一般家庭からの鉄・銅資源回収や、

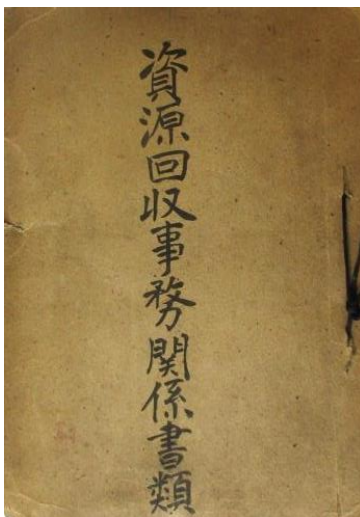


写真14

銅・白銅・ニッケルの補助貨回収、それらを推進する広報活動など、地方レベルでの政策遂行実態が判明する。さらに、道内各市・支庁別の割当量と回収実績の具体的な数値なども含まれ、戦時期の貴重な数量データを提供している。

こうした情報は、戦時期の政策が市民生活に及ぼした具体的影響を正確に把握できるものであり、本簿冊は今後の講演資料としても大いに活用が期待されるものである。

## おわりに

本稿では、これまでの学齢期を中心とした若年層への利用普及事業実績をふまえ、今年度実施した立命館慶祥中学校での講演活動を中心に、その成果と課題、さらに今後の利用普及事業への展開性という視点から検証を行った。

まず、今年度の学校における講演活動と学校連携事業への展開という点では、講演と実物資料閲覧をあわせて実施する形式の構築を含め、大きな成果が得られた。生徒たちに所蔵記録に基づいて解説したことが現実感を伴って理解することにつながり、さらにはそうしたことを可能とする「記録の機能」と「所蔵機関の役割」についても説明する機会ができたと考えている。とくに、自館の所蔵資料を素材にコンテンツを構成し、実物閲覧と組み合わせるといった手法は、資料所蔵機関ならではのものであり、今後の本館の利用普及事業における強みとして活用できるものである。

なお、今年度は一度の講演のみで終了してしまっただが、同校とは次年度以降も継続的な事業依頼を獲得しており、生徒との対話の方法も含めて方法的再検討をしていきたい。

また、今年度は普遍的テーマ「戦争とはなにか」における「各論」として、「札幌ではどうだったのか」という講演を展開した。公文書館としては、札幌のあゆみや今後の市民生活、まちづくりを総合的に考える素材として、記録を活用する場の提供を目的としており、学校連携事業もその一環に位置づけたいと考えている。しかし、こうした総合的なテーマ設定のほかにも、今回の活動を通じて、「各論」として地域を相対化して考える手法も有効であるとの知見を得た。

このことは、とくに本館のような基礎自治体アーカイブズには重要な視点であり、とりわけ学校連携事業などへの展開において重視すべき点であると考ええる。そういった意味で、今年度実施した講演活動は、戦時資料という特徴的な資料群を素材としていたが、所蔵資料の教材化と学校連携事業の推進にむけて、ひとつの足がかりを提供できたものと思っている。

今後は今回の反省点を生かし、継続的な学校連携へと発展できるよう形式や実施方法の検討を重ねるとともに、札幌市内の他の小中学校や、高校での講演活動も視野に積極的な展開を計画していきたい。

(札幌市公文書館専門員)

#### -注-

- 1 例えば、平成24年度(2012)には、岩見沢市立明成中学校、幕別町立札幌南小学校、26年度には北海道有朋高校が来館利用している。
- 2 こうした問題関心を共有する論考としては、すでに榎本洋介「札幌の歴史教育の教材化について」(『札幌市文化資料室紀要』第5号、p48～80)がある。本館の前身である文化資料室での子供向けセミナーの実績をふまえ、札幌の都市建設・都市整備をテーマとして、所蔵資料の学校教材化を念頭に、詳細な資料解説を行っている。
- 3 札幌空襲については、林恒子「札幌空襲の実態」(『札幌の歴史』第2号、p13～27)、札幌市『語り継ぐ札幌市民100人の戦争体験(下)』(【解説10】札幌空襲 p22～23)を参照。
- 4 写真カード「南一西十一宮口豊吉少尉出征出発記念(支那事変)」(No.18579)。
- 5 特定重要公文書「米田家資料」(No.2015-0707)。なお、米田夫妻のはがきについては、海保洋子「五二通の軍事郵便」(『札幌の歴史』第41号、p1～2)を参照。
- 6 大浦正夫氏提供出征国旗(文書・図書資料 No.34424)。
- 7 以下、市民生活の諸相については、札幌市教育委員会編『新札幌市史』第4巻、「太平洋戦争下の市民生活」(p826～850)等を参照。
- 8 札幌市役所『防空教科書』(文書・図書資料 No.7661)。
- 9 写真カード「昭和十四年八月二十五日第二次防空訓練」(No.18599)。
- 10 写真カード「昭和19年防空訓練」(No.6230)。
- 11 写真カード「防空・防火訓練」(No.6005/16155/5970)。
- 12 写真カード「南4条疎開跡地」(No.S11138)。
- 13 米国国立公文書館所蔵米軍撮影空中写真(昭和20年)。
- 14 特定重要公文書「今田敬一資料」(No.2015-0700)。詳細については本誌所収の木村論文を参照されたい。
- 15 写真カード「感状」(No.S19437)および小野寺奈緒美「戦禍と女性」(札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫73 昭和の話』p170～175)を参照。
- 16 写真カード「軍馬出征に際して」(No. S14685)。
- 17 枝並ナツヨ「農家から馬車追いに嫁いで」(札幌市教育委員会編『さっぽろ文庫43 大正の話』(p250～257)。
- 18 詳しくは、本誌所収の西田秀子論文を参照されたい。本講演で使用した資料についても引用・解説されている。
- 19 「支那事変記念スタンプ帳」(文書・図書資料 No.34434)。
- 20 長柄昭子「女学校卒で情報通信の仕事が…」(前掲『語り継ぐ札幌市民100人の戦争体験(下)』p36～42)。
- 21 とくに第二次世界大戦での戦勝国などに多い。たとえばオーストラリア戦争記念館での展示などからは、そうした概念が顕著である。
- 22 「浦東繁資料」は現在私文書に仮登録の状態で開催されているが、次年度以降特定重要公文書へ登録予定である。
- 23 当該簿冊群の作成者は北海道庁職員の高島太郎であり、担当職員の個人控えとして所持していたものと考えられるが、現在詳細を調査中である。